

## 普賢菩薩の物語

昔、播磨の國に、性空上人と云ふ甚だ信心深い博學な僧が住んでゐた。長い間彼は妙法蓮華經の普賢菩薩の章について毎日默想した、そして現身の普賢菩薩を、又聖い經文原註に述べてある姿そのままを、拜する事のいつか得られるやうに、毎朝毎晩いつも祈つてゐた。

或晩讀經の間に睡氣を催ふした、曲まが録りやくにもたれながら眠つた。そして夢を見た、そして夢のうちに聲があつて、普賢菩薩を見るためには、神崎の町に住む『遊女の長者』として知られた或遊女の家に行くべき事を彼に告げた。さめると直ちに、彼は神崎へ行く決心をした、——そしてできるだけ急いで、彼は翌日の夕方、町に着いた。

彼が遊女の家に入ると、そこにはすでに大勢の人の集まつて居るのを見た——大概はこの女の美しいと云ふ評判を聞いて、神崎へ引きよせられた人達であつた。彼等は宴會をしてゐた、そして遊女は小さい鼓を打つてゐたが、彼女はそれを甚だ巧みに使つて、歌を歌つてゐた、その言葉はかうであつた、——

周防むろづみの中なるみたら井に

風は吹かねど

さゝら波立つ

その聲の美しいので、驚いて喜ばない者はなかつた。離れて席を取つてゐた僧がそれを聴いて感心して居ると、女は突然彼女の眼を彼の方へ向けて彼を見まもつた。同時に彼は彼女の姿が六牙の白象に乗つた普賢菩薩の姿に變つて、眉間から光明を放つて宇宙のはてまでも貫くやうに思はれた。そしてやはり彼女は歌つた——しかしその歌は今變つてゐた、そしてその文句は僧の耳にはこんな風に響いた、——

實相無漏の大海に

五塵六欲の風は吹かねど

隨緣眞如の浪の立たぬ時なし

聖い光明のために眩まされて、僧は眼を閉ぢてゐた、しかし目蓋を通して彼はやはり明らかに菩薩の姿を見る事ができた。再び彼が眼を開くと、その姿が見えなかつた、彼はただ鼓をもつた少女を見て、むろづみの水に關する歌を聞くだけであつた。しかし彼が眼を閉ぢる毎に六牙の象に乗つた普賢菩薩を見て、實相無漏の大海の神祕な歌を聞く事ができた。そこに居る外の人々

は、遊女を見るだけであつた、彼等はその幻は見なかつた。

それから歌ひ妓は突然その宴席から消えた、——誰もいつ、どうしてか知らなかつた。その時から酒宴は止んだ、そして哀愁が歡樂に代つた。その少女をさがして待つたが無駄であつたので、人々は悲しんで解散した。最後に、僧はその夜の情緒に惑亂されて歸途についた。しかし彼が一步門を出ると、遊女が彼の前に現れて云つた、——『今夜御覽になつた事は、未だ誰にも口外してはなりません』これだけ云つてから、彼女は消え去つた、——芳しい香が空中に残つた。

\*  
\*  
\*

以上の物語を書いた僧は、それにつきのやうな註釋を加へて居る。——遊女の境遇は男の慾を満足させるやうな賤しい哀れな物である。それだから、どうしてこんな女が菩薩の化身と思ふ事ができよう。しかし私共は佛菩薩はこの世に於て無數の違つた形となつて現れる事を忘れてはならない、人を正しい道へ導いて迷の危険から救ふためには、如何に下等な賤しむべき形をもその聖い慈悲の目的のために選ぶ事を忘れてはならない。

(田部隆次譯)

*A Legend of Yugen-Bosatsu. (Shadowings.)*

原註　この僧の願は多分『妙法蓮華經』の『普賢菩薩勸發品』と云ふ章にある約束によ

つて起されたのであらう。『その時に、普賢菩薩、佛に白して言さく「もしこの人の經を謹誦せば、我その時に六牙の白象王に乗つて、大菩薩衆と共に、その所に到つて、自ら身を現じて、供養し守護してその心を安慰せん、また法華經を供養せんがため故なり、この人もし坐してこの經を思惟せば、その時に我また白象に乗つてその人の前に現ぜん、その人もし法華經に於て一句一偈をも忘失する所あらば、我まさにこれを教つてともに讀誦しかへつて通利せしむべし」……』——しかしこの約束は『後の五百歳濁惡世の中に於て』の事である。